

TOEFL メールマガジン VOL.113

December 2012

For Lifelong English

▶ [バックナンバーはこちら](#)

様々な世代の人々が様々な場で、生涯を通して何らかの形で英語にかかわって仕事をしています。英語は人それぞれ、その場その場で違います。このシリーズでは、英語を使って活躍する方にお話を聞き、その人の生活にどう英語が根付いているかを皆さんにご紹介し、英語の魅力、生涯にわたる楽しさをお伝えしていきます。英語はこんなに楽しいもの、英語は一生つきあえるもの。ぜひ英語を好きになってください。

第56回 いまこそ日本の教育を世界レベルへ その2 ～二人の教育・言語の著名教授が語る教育の向上・発信とは～



鈴木 孝夫（すずき たかお）先生

慶應義塾大学名誉教授
慶應義塾大学医学部入学後 文学部英文科に移籍し卒業
ミシガン大学及びカナダ・マギル大学に留学
後にイエール大学及びイリノイ大学客員教授
ケンブリッジ大学エマニュエル校及びダウニング校訪問フ
ェロー
日本野鳥の会顧問



谷口 吉弘先生

1980年代後半から、立命館大学「21世紀学園構想委員会」に委員で参加し、新しい理工学部の教育研究の展開について答申した。1994年、理工学部が京都の衣笠から滋賀県草津市へ移転後、理工学部再編拡充事務局長として理工学部の教育改革を実施した。1998年から3ヶ年
間、理工学部長を務める。また、2007年から、生命科学部・薬学部の設置にかかわり、2008年から3ヶ年間
初代生命科学部長、その後、学校法人立命館総長特別補佐
を歴任、2012年3月立命館大学を定年退職。現在、平安
女学院大学副学長、平安女学院中学校高等学校校長、京
都府立医科大学客員教授、立命館大学名誉教授。文部科学
省、経済産業省 各種委員。滋賀県産業教育審議会会長



聞き手：鈴木 佑治先生

立命館大学生命科学部生命情報学科教授
慶應義塾大学名誉教授

今月号の更新ページメニュー

▶ 今月の目次

TOEFL iBT情報

- ▶ TOEFL iBT 体験レポート
- ▶ スカラシップ プログラム

教育関係者向け情報

- ▶ イベントレポート

読み物

- ▶ For Lifelong English
- ▶ 俳句で一息 Haiku Time

留学／英語学習情報

- ▶ 逢セミに学ぶ英語学習のヒント
- ▶ My Phrase My Word

オフィシャルサイトへ

- ▶ TOEFLテストトップページ
- ▶ TOEFLテスト教材ショップ
- ▶ TOEFL ITP テスト
- ▶ Criterion



- 谷口先生：** 私は今、高校3年生の授業を持っています。その中で授業の内容の感想文を生徒に書かせるのですが、その内容を見ていると、いかに本を読んでいないのかがわかります。本を読んでいないから、内容がどれも同じレベルの感想文なんです。深く考えて書かれてない。大学のレポートもディスカッションの部分は、実験結果に対して議論をしなくてはならないのに、感想的な表現になっています。レポートになっていません。高校で、いろいろと文章を書かせても、深く考えずに、感覚だけで書いているという感じです。深く考えていないことがよくわかります。また、これはあまり本を読んでいない証拠です。そこで、来年から中学・高校で読書習慣をつけるプロジェクトを始める予定です。
- 鈴木佑治先生：** そうですね。思ったように書きなさいと言われても簡単にできることではありません。考えがなければ書けません。誰かが言ったことを丸暗記して書く事に慣れてきたからでしょうか。
- 谷口先生：** 暗記もそうですが、勉強は五感を使って学ばなければいけないと思います。大学では学生の授業評価というのがあります。先生は学生の授業評価を良くするために、授業の理解力を上げる名目で時間をかけて綺麗なパワーポイントを造り上げるわけです。もちろんそうすれば、学生からの授業評価は良くなります。一方で、昔ながらの板書で、学生はノートを書き写すというスタイルで授業を進める方が学生からの評判は良くありませんが、試験の結果は良く、板書のほうが内容に関する理解力が深まります。要するに板書スタイルで授業をすると、学生はノートを書くことで、手や目を使い脳を働かすことで五感を使うわけです。ところが、パワーポイントの授業では、映像を目で追うだけ、そのときはわかった気になっているだけです。
- 鈴木孝夫先生：** 先生、その通りです。私も先生に大賛成ですね。パワーポイントって、ウィークポイントに名前変えたほうがいいんじゃないかと思いますね。大体故障してバタバタしてサポートスタッフがくるまでに10分かかってなんて大変。私もチョークで書くことで「あれこの漢字で良かったっけな？」と思ったり、いたずらして書いたことを、学生がノートに写して隣の人に見せて「これ何て書いてあるんだ？」と見せ合ったり、そういうところがいいわけです。時間をかけないで、パッと綺麗に次のページ、また次のページと展開したところで何の意味もないんです。
- 谷口先生：** パワーポイントを使えば授業の進度は上がり、予定の内容を時間内で終わることができます。板書で授業をすると、板書に時間がかかり、授業の途中で計算を間違えることもあり、内容も行ったり来たりになることもあります。そうすると学生は先生も間違えるんだと認識し、先生と学生の距離感が一気に縮まります。そういう雰囲気は授業にはとても大切です。このように授業では先生と生徒のコミュニケーションが必要です。
- 鈴木孝夫先生：** そうですね。先生が学生をつかめるんですよね。落語家と同じで板書してツカミを得るんです。授業をしながら雑談したり、「君何寝てるんだっ！」なんていいながら授業を進めていくと、教室が活性化するんです。ところが、パワーポイントを使って、「はい次、はい次」ってやっているのは、だめなんですよ。
- 谷口先生：** ええ。ですから、授業にもよりますが、今の授業スタイルは感心しません。学生の評価ばかりを気にし過ぎるのは良くないですね。授業のあり方として、昔のままがいいとは言いませんが、やはり五感を使って、しかもコミュニケーションを豊かにして学ばせるスタイルが必要だと思います。



鈴木佑治先生： それでは、本を読ませるプロジェクトでは、どういう本を薦められますか？

谷口先生： 深く考える内容の本ですね。たとえば、哲学書や古典、伝記などを生徒に是非読ませたいですね。生徒に「何になりたい？」と聞いても答えが返ってこない。自分が何になりたいかがないんですね。昔は、家族や親戚縁者、友達など多くの人に囲まれて育つから、自分のモデルになるものが周りにたくさんありました。先生だったり、お父さんだったり、親戚のおにいちゃんだったり、「アインシュタインみたいになりたい」と言える社会の雰囲気がありました。今は、核家族でしかも自分の部屋もあるから、モデルになるものが周りに見当たらないんですよ。だからそのモデルを子供たちに見せないといけないと思います。キャリア教育では、モデルを見せることが必要です。

鈴木孝夫先生： 昔は、茶の間があって親父が居てガヤガヤして、テレビに対してコメントすると家族の誰かが「それは違うよ」と意見したりしてました。でも今はそうではありません。

谷口先生： 今の学生は、留学生も含めて1ルームマンションに居ます。あれはよくありません。共同生活スタイルの寮や宿舎が必要でしょう。

鈴木佑治先生： そうですね。せめて相部屋くらいでなくては。アメリカでは、ドミトリーは最低でも相部屋ですから、助け合いがあったり悪いことも教わるけど、人間は社会動物ですから、社会というか他人との関係性がないといけません。コミュニケーションとは他者との知識の共有です。

鈴木佑治先生： アメリカでは、ボーディングハウスがあります。日本でも下宿がありました。私も学生時代に下宿生活をしました。私以外はみな社会人でした。楽しい事ばかりではなく、時には嫌なこともありましたが、みんなで話し合いながら折り合いを付けたものです。社会人に接することができましたし、分け隔てなく親のように叱ってくれた家主さんとよく話しました。家主のご家族とは今でも親交があります。今の学生さんは、そうしたコミュニケーションの場が無いのではないのでしょうか。

谷口先生： そうですよ、日本の学生は特にコミュニケーションが下手ですね。

鈴木孝夫先生： でもね先生、簡単にいうと物質繁栄の陰に人間性の崩壊、チャイナシンドロームというのはまさに日本の人間が溶けだしていることが問題なんだと思います。

鈴木佑治先生： 日本の学校に最近見られなくなったものは何か、それは、昔は確固として存在した家族的な小さなコミュニティーの存在でしょうか。学校とかなんとかを問題にする前に、そういう小さな家族的環境、それを基にしたコミュニティー形成を見直さなければいけないのではないのでしょうか？アメリカというと個人主義で、家族もみなバラバラと考えがちですが、私がここ40年

触れてきたアメリカは、今でもクリスマスや感謝祭で家族が集まるなど、意外と家族を大事にしているように見受けられるのです。親友などを家族に加えるextended family的なものもあり、小さなコミュニティがいまでもきちんと生きています。人気のあるスモールタウン・カレッジはみな家族的ですよ。学園祭をホームカミングなどとも呼んでいますし。

鈴木孝夫先生： そう！その通りですよ。制服が日本にはあるから画一的な軍国主義なのだ、制服禁止、と言われましたよね過去に。でも、アメリカやイギリスの一流の学校にはみんな制服があるわけです。

鈴木佑治先生： たとえば昔の大学の寮みたいなのはいかがですか？

鈴木孝夫先生： あそこは人間を鍛えるにはいい場所です。

鈴木佑治先生： そこで、いろんな人と話す、それが学校だったわけです。

鈴木孝夫先生： そうですよ、友達もできれば敵も出来る。そしてそのなかで社会の裏も表も見る事ができて要領も得て、人脈も出来るわけです。一人っていうのは、ツルツルの壁の中にいるようなもので、手がかりも情報もない。

谷口先生： だからそれを打破しない限りコミュニケーションを含めた対人関係がうまくいきません。今、大学には、混在型の寮を作ることが求められています。寮には個人スペースに加えて、共有スペースがあって、日本人学生と外国人留学生がともに共同生活できる場が必要です。

鈴木孝夫先生： そうですね。隣の部屋にはインドネシア人でその隣はフランス人というような環境であれば、より日本を知ることができますよね。



鈴木佑治先生： 大学を云々する前に、日本全体のコミュニティ環境をもう一度考え直さないといけないようです。さきほど日本語ができないと話がありましたが、日本語を使ってコミュニケーションする場が無いのが主因でしょう。友達とも話ができているわけですから。私から一つ提案したいと思います。先生方のようなご高名な先生方に、私が学生時代に会った家主さんのような役割をしていただき、若い学生や先生たちと人生について思いっきり話し合っていたいただきたい。

鈴木孝夫先生： 名誉教授が行くと迷惑がられますから。

鈴木佑治先生： こういう偉大な先生が来てくださって、先生方の話を聞き、教養を吸い上げられるしくみが必要だと思います。

谷口先生： 私が最近参加している研究会に、ベテランズ研究会というグループが京都にあります。専門分野は文系が中心ですが、特に専門は問いません。参加資格の年齢制限は70歳以上ですが、主に80歳台の名誉教授の先生方で構成されています。

鈴木孝夫先生： 老人の智慧を無駄にしてはいけません。無駄に生きてきたわけではないのですから。老人ならいいってもんでもないですけど。

今私は、江戸時代を見直していますがその当時「ゴミ屋さん」というのはありませんでした。私の子供の頃も、ゴミ屋さんなんて頻繁にはきませんでした。だって、捨てるものがありませんから。食べ物を捨てるなんてことしたら殴られましたよね。今の人は、安売りだと聞けば買い込んで、ミイラになった半分溶けたキャベツと、今買った新鮮なキャベツが冷蔵庫にあるなんて風でしょ？お金がないのではなく、頭がおかしくなってしまうんです。ですから、私は、日本語の教育も下手すると日本文学で万葉集を教えたり、徒然草で日本語教育なんてことになっては、違うと思うんです。アメリカで子供がSHOW AND TELLということを授業でやるんです。昨日自分の家に来たおばさんの話をクラスの全員が分るように話すのです。いつ何をしにやってきて、おばさんはどんな人でなぜその人が自分のおばさんなのか、自分は知っている情報でみんなは知らない情報をどうやって知らせるかという、SHOW AND TELLやスピーチをするとき、他の人とコミュニケーションをする術を子供たちに実演させているわけです。

鈴木佑治先生： そうなんです。私が言いたいのはそれです。私は学会という一方通行な場ではなくて、こうして話せる場を作ってお二人のお話を学生に伝える機会がもてたらと考えます。



鈴木佑治先生の感想

黒澤明の名画「どですかでん」を見ると、終戦後の貧しかった時代がシチュールに描かれています。先日、英語プロジェクトの授業で学生さんが世界の貧困について発表しておりました。裕福な側から見た貧困です。自分の父母を育てた祖父母の幼少時には日本も最貧国で、一個の七輪で炭火を起こして煮炊きしながら糊口をしのいだ多くの家庭があったことなど知りません。人々と世代を超えて交流する場があったら、貧困に対する考えがさらに深まったことでしょう。谷口先生の言われる五感で考えることに、また、鈴木孝夫先生が『[人にはどれほど物が必要か](#)』（岩波）で言われる生き方に共感します。

- 「鈴木孝夫先生、谷口吉弘先生、2人の名誉教に聞く」-全3回
112号- [第55回 いまこそ日本の教育を世界レベルへ その1](#)
114号- [第57回 いまこそ日本の教育を世界レベルへ その3](#) (2013年2月20日配信予定)

関連記事

[第48回 立命館大学総長特別補佐/谷口吉弘先生に聞く その3](#)
[第47回 立命館大学総長特別補佐/谷口吉弘先生に聞く その2](#)

- [第46回 立命館大学総長特別補佐/谷口吉弘先生に聞く その1](#)
- [第19回 言語社会学者の鈴木孝夫先生に聞く その3](#)
- [第18回 言語社会学者の鈴木孝夫先生に聞く その2](#)
- [第17回 言語社会学者の鈴木孝夫先生に聞く その1](#)

[▲このページのトップへ戻る▲](#)

TOEFLテスト日本事務局
<https://www.etsjapan.jp/>

[プライバシーポリシー](#) | [お問合せ](#) |

上記は掲載時の情報です。予めご了承ください。最新情報は関連のウェブページよりご確認ください。

(c) ETS Japan, All Rights Reserved.